
スーパーシンジならぬスーパールイズ

薄赤球体

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーシンジならぬスーパールイズ

【Zコード】

Z2647F

【作者名】

薄赤球体

【あらすじ】

使い魔を召還しようとしたルイズはひょんなことから人間を辞めてしまう羽目になってしまった・・・

プロローグ（前書き）

初めての投稿ですが遅筆となりましても、完結を目指して頑張りう
と思います。

プロローグ

・・・ザザーン・・・・
ザザーン・・・・

波の音が聞こえ、波が砂浜に向かっていく。その波は、砂浜に横たわっていた一人の少年の体を濡らし消えていく。しばらくそれが繰り返され、少年が目を覚ました。

「うつ・・・・、」には一体？それに、あの量産機達はどうなったんだ・・・・？」

そう呟くと少年は辺りを見回してみた。まず視界に入ってきた物は異常に赤い海、そして少年の同僚である少女のプラグスーツだけが落ちてた。

「この赤いのは「」・・・? それに何でプラグスーツだけがおちているんだ? アスカは! ? アスカは一体どうなったんだ! ? 教えてくれよ! 誰でもいいから何とかいってくれよッ!」

答えられることもなく、帰つてくるのは沈黙ばかりであった。しばらくそのままの状態が続き、声がした。

「・・・セカンドは無に還つてしまつたわ、碇くん・・・・」

「あ、綾波! ? 一体どこから・・・いや、それよりも無に還つたつてなんなんだ! ?」

碇君、と呼ばれた少年が思わず突如現れた綾波と呼んだ少女に怒鳴

るよつて聞いて聞き返す。それに答えたのは、また別の声だった。

「それは文字道理の意味だよシンジ君。サードインパクトが発生し、心が壊れていた彼女はそれに耐えることが出来なかつた、ただそれだけの事だ。」

「力、カラル君まで…？」に隠れてたんだよ…それに、サードインパクトが発生しちやつたつて本当なの…？アスカがいないことなんの関係があるつていうのや…？」

そうしてシンジはカラルと呼んだノンケでも思わずホイホイついていつてしまいそつな少年に尋ねた。

「かくかくしかじか、そういうわけなんだよシンジ君。」

シンジはカラルから、それまで2人がどこにいたのか、サーティンパクトとは何か、アスカの液状化現象はもちろんのこと、好きな男のタイプまでを詳しくより明確に聞いた。（最後のは聞かなかつたことにした。そうしなければ身の危険を感じるためだつた。）

「そんな…なら僕は一体どうすればいいのさ…？」

「君のしたいようにすればいいさ。僕とラブラブフィールドをつくることも出来るし、なんなら過去に戻ることも可能だからね。」

「それなら僕は過去に戻る！そして絶対にこの悲劇を起さないようにしたい！」

（そんな…始めから最初の選択肢には興味は無いつてのかいシンジ君…）

落ち込んでいるカラルをスルーしつつ綾波が続けて言った。

（碇くんとのラブラブフィールドをつくるのはこの私・・・フィフス、貴方は砂粒の数でも数えているといいわ・・・）

「そう、私とこの木モの力を合わせれば過去に戻ることも可能よ。」

復活したカラルもそれに続き言い放つ。

「そうさ、しかも今ならここに溶け込んだ全ての人の知識もお付けするよ。」

パチパチパチ、と綾波が拍手する。シンジは呆然として言葉を発することが出来ずにいる。

「ん？どうやらまだ足りないようだねえ。まったくシンジ君は、しようがないから使徒化+全ての使徒の能力をおつけするよ。この、いやしんぼめ！」

「ぶらぼー」

何を勘違いしたのかカラルはそんな大サービスをし、綾波はそれを褒め称えた。しばらくしてシンジは気を取り直し言った。

「それならその力を僕にくれるかい？綾波、カラル君。」

「ええ。」「もちろんさ。」

「「私（僕）の力よ！人々の記憶よ！使徒たちの能力よ！一つになりなさい！！」「

そう叫んだ直後、2人とシンジとの間に赤い30センチ程の球が出現した。

「これが、その力が1つになつた物なの？」

「そう。」「そうだよシンジ君。」

その球はフヨフヨと移動を始め、シンジの所まで後一歩といつ所で突如現れた鏡のようなものに飲み込まれ、消えた。

・・・辺りを沈黙が覆つた。この空氣なら流石にあの髭もダッシュで逃げてしまふだろう。空気が重い、重すぎる。

・・・そしてようやく綾波が口を開いた。

「・・・こんな時どんな顔をすればいいのかわからないの・・・」

「それは僕もだよ、綾波・・・」

2人して口を閉ざしてしまった。その後カヲルが言った。

「あれれ？ 僕には偶然にも2人過去に戻れるだけの力があるようだよ～？」

重要なことをまるでどこかの天然少女のような口調で告げた。

「奇遇ね・・・私もよフィフス・・・」

綾波も負けるまいと言い返す。

(（このやうう・・・ツー力を残して後で有利になれるよつにしていたな・・・ツー））

「どうやらこの2人、考へることは大体同じよつである。

「ま、まあ、2人とも、ならその力を使って過去に戻らうよ。」

2人のようすに怯えつつシンジがそういった。

「そう・・・なら過去に戻りましょう、碇くんとおまけにホモも「なら戻るとしようか、シンジ君、後えつと・・・綾なんとかさんも」

（（絶対こいつには負けない！！））

そうしてこの終末を迎えた世界から3人の姿は消えた。後に残されたのは赤い海だけだった・・・

同時刻トリステイン魔法学院。

ここでは神聖なる使い魔召還の儀式が行われていた。

この使い魔召還の儀式は「己の魔法の実力が映されているといつてい

い。

おまけに召還された使い魔は生涯を通して付き合ひとなるパー

トナーといつても過言では無いため、不真面目に取り組む生徒はない。

そのためこの儀式に臨む誰も彼もが今日といつ日を心待ちにしているだろう。

召還を終えた生徒たちはそれぞれ笑顔で新しい自分達のパートナーとの交流をおこなっている。しかし、そんな中、何故か何度も爆音がその場に鳴り響いていた・・・

(どうしてよ・・・どうして失敗するのよツー)

ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール。

彼女が召還の儀式が行われている広場に爆音を鳴り響かせている者の正体だった。

「なあ～そろそろ諦めろよ。お前の精神力より広場がまいつらまつよ~~~~」

「ていうかゼロのお前が召還できるわけねーじゃん~~~~」

「ほにはーフロスフロス。」

まわりから聞こえてくる声にも耳を傾けよつともせず、少女はひたすらに召還の呪文を唱え続けていた。

「ミス・ヴァリエール、次を最後にして失敗したら続きは明日にしない。」

「はい・・・コルベール先生・・・。」

どうやらこの「ルベール」と呼ばれた人物はこの儀式の責任者のようだった。

(ええい！しつかりしなさい私！もう次にかけるしかないわ！)

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ。神聖で美しく、そして強力な使い魔よ。私は心より求め、訴えるわ。我が導きに、応えなさい！」

今度は爆発はしなかった。そして鏡のようなものが、ルイズの前に姿を現した。

(やつたわ！一体何が出てくるのかしら？)

鏡から姿を現したのは赤い、30センチメイルの球のようなものだつた。

「よかつたね、ミス・ヴァリエール。早く契約をすませるんだ。」

「はい！コルベール先生！」

そうしてルイズは契約の呪文を唱え始めた。

(やつたわ！私！私はやれば出来る娘だつたのよ！)

「我が名は、ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール、五つの力を同るペンタゴン。この者に祝福を『え、我の使い魔となせ

その物体に口付けした刹那、ルイズに様々な変化が起きた。

流れ込む赤い世界に生きていた人々の記憶、知識、ATフィールドを張ることが出来る体に変化し、その体には全ての使徒の能力が流れ込み、額に何かが浮かび上がる

こうして本来あの少年が手に入れるはずだった力を私は手に入れてしまったんだなあ、と思いつつルイズの脳はその処理能力をはるかに超える情報を処理したために一時的に停止した。

そして次に目を覚ました所は医務室と思われる場所だった・・・。

「・・・見慣れた天井だわ・・・。」

ひょんなことから人間を辞めることになってしまったルイズの明日はどうちだ！

プロローグ（後書き）

今のところはこの二人組はもう出ないと想います。たぶん。

第1話（前書き）

前回人間を辞め、使徒となってしまったルイズ。そんな彼女がようやく医務室で田を覚ましたのであった。

第1話

意識が戻ったルイズはまず、鏡を見てみることにした。貴族たるものの身だしなみは大切だからだった。ところが・・・

「な、何よこれ！？」

鏡を見たルイズの目にまず飛び込んできた物、それは本来、使い魔に刻まれる筈の契約の証のルーン、それが自分の額に刻まれている光景だった。

「何で自分にルーンが刻まれているのよ・・・ハッ！そうよルイズ、これは何かの間違いよ！きつとここは夢の中なんだわ！」

そうやつて頬をつねつてみた。痛い。今度は太もももつねつてみた。痛い。希望を捨てられず体中をつねつてはみたものの、現実は変わってくれなかつた。

「どうして私が自分自身の使い魔になっちゃつたのよ・・・しかも！氣絶する前に見た記憶が本当だつたら、試験に失敗して学校を辞めるのよりも早く、人間辞めちゃつたことになつてるわ！」

そう、ルイズは覚えていた。記憶の中で異世界の様子を、知識を、なにより最後の三人組の会話の内容をツ！

「あのシンジつていう奴もちょっとは止めなさいよ・・・全然関係なかつたのに、人間辞められた私の気持ちにもなつてみてよ・・・」

「

ルイズはこう愚痴をこぼしたが、当のシンジは世界を救うという目標があつたために止めるなどこれっぽっちもなかつたのだ。

「でも・・・すごい力が手に入つたんだし、せつかくだから何か使徒の能力でも使ってみるとしましょう。」

何故、急にルイズが前向きになつたのかにはわけがあつた。ルーンの効果の中には主へ少しずつ好意をすり込んでいくものがある。ルイズは自覚はしていないが、今までにその効果が發揮されてきたからだつた。

「じゃあまずは、えーていーふいーるど?」

なれない発音に、最後は疑問系になりつつ、ルイズは手を前に出してみた。

赤い壁は現れなかつた。不発だつた。ルイズはちょっと恥ずかしくなりつつ、誰にも見られてなくて本当によかつたと思つた。

ルイズはいつも魔法の練習をしていては失敗し、医務室に行くことは珍しいことではなかつた。この医務室の担当者もルイズが倒れた後の騒ぎをおさめ、その後の進行で忙しかつたコルベールから説明を受けておらず、運んだ生徒も人を運べる竜を召還したタバサだつたので

「・・・倒れた・・・よろしく。」

としか言われてなかつた。そのため、医務室の担当者も

(あーまたこいつか。3時間後ぐらゐに来たらいいか。)

と考え、医務室の扉に鍵をかけ、別の用事でどこかへいってしまったのだった。

ルイズが目覚めたのは、倒れた40分後と以外に早く、この先1時間ぐらいは人が来ることはなかつたのだ。それを知らないルイズは人に見られてはいけないと思い、試すのは攻撃の能力意外にしようと思ったのだ。

ルイズはATフィールドの展開に失敗してからあることを思い出していた。

（ん？たしか誰かがATフィールドは拒絶の意思とか言つてたわね。。。よつし・・・「ハアハア 变な息しながらこいつちくんなマルコリヌ！」・・・）こんな感じかしら？

その瞬間、ルイズにかけられていた毛布は突然現れた赤い壁に弾き飛ばされた。マルコリヌには悪いがルイズはATフィールドの展開に成功したのであつた。

「一度展開出来たらけつこう簡単なのね・・・。次は何にしようかしら？でも、ほんどうがこの部屋を吹き飛ばしそうね・・・。イスラフホルっていう奴のを試してみましょう。」

すると、その場にはルイズガ2人になつた。某双子芸人も真っ青なほど似ていた。まあ、双子ではなく、分裂したものであるのだから当然ではある。

「私はルイズよ、貴女は？」

「私もルイズよ。ていうか貴女は本体でしょーそれくらいわかってるね！」

「じつやら分身は意思を持っているらしく、区別がついているらしい。おまけに、性格も本体そくりだった。

「じゃあ、分身の貴女はルーちゃんなんですか？」

ルイズはふぞろひにうつ聞いてみた。

「私はそれでいいわよ。」

（えつ！？本当にそれでいいの！？）

分身は名前はこだわらないようだった。
他にもルイズが色々話してみようとした時、廊下から足音が聞こえた。

「もうちよつと話をしたかったんだけれど残念ね。また会いましょう、ルーちゃん。」

「わかつたわ。また読んでね。あつ、べ、別に寂しいから呼んで欲しいわけじゃないんだからねッ！勘違いしないでよね！」

そういうのこし、ルーちゃんは本体と一つになつた。ルーちゃんの言葉を聞いたルイズは

（自分はいつもこんな感じなの？）

と不安になつたのはルイズだけの秘密だ。

やがてドアがノックされた。

「ミス・ヴァリエール、起きていますか？」

「あつ、はい！コルベール先生。今起きたところです。」

どうやら、声の主はコルベールのようだった。

「ミス・ヴァリエール。貴女の処分に関するのですが、学園長の判断はルーン自身は刻むことは成功しているので、進級を許すとのことでした。」

コルベール先生の話によると、何とか私は進級を許されたようだ。まあ、あのオールドオスマンのことだから

「まあ、成功したことでいいんじゃね？」

とこうよくなぶりで許可したんだね。流石にそれはないかな？

実際はルイズの思った通りのようだったということは、ルイズ本人は知るよしもない。他にはルイズの両親の圧力が怖いから、という理由もあったからだつた。

「今日は色々あって疲れただろう。起きても大丈夫なら部屋に戻つてもかまいませんよ。最後に、進級おめでとう！ミス・ヴァリエール！」

「ありがとうございます、コルベール先生。それと私はもう大丈夫です。部屋に戻させていただきます。」

そういうとルイズはベッドからおり、部屋に帰つていった。まだ試

してみたいことがあつたからだ。

ルイズが医務室から姿を消した後、1人になったコルベールは口を開いた。

「本当に良かったですねミス・ヴァリエール。あの娘は人一番努力していましたからね・・・。それにしてもあのルーンは見たことがありませんね。ふむ、図書室の本の中にはこのスケッチの模様と合うルーンを探してみるしますかね。」

コルベールも部屋から出て行こうとしたとき、視界の端に何かが入ってきた。

「おや？こんな所に毛布が。ミス・ヴァリエールは寝相が悪かったのでしょうか？」

そういうつつ、コルベールはベットから結構離れていた場所に落ちていた毛布をベットの上に置いた後、部屋を出て行った。

一方部屋に戻ったルイズは、

「今日は疲れたから試すのはレリエルのディラックの海っていうやつでの移動実験で終わりにして寝ましょ。」

そういうと、ルイズは移動先を考え始めた。

「うーん。どうせやるなら遠くにいきたいわね。えーと・・・そうだわ！私の家の中庭の池の小船の近くにしましょー。もう暗くなるからきっと誰もいないわ。」

決まり！決まり！そうこうとルイズは足元に広げた影のよつなるものに潜つていった。

ラ・ヴァリエール家にある中庭。そこは先程までは誰もいない場所だった。だが、中庭の一箇所に影のよつなるものが広がると、そこから人が現れた。

「うわー本当にいちゃつたよ。ホント私って人間じゃなくなつちやつたんだなあ・・・。」

「どうやら、ルイズはあまりに人間離れした自分に若干引いているようだつた。

「でも便利ね、これ。実は私、相当ラッキーだつたんだわ。いまで涙を呞んで頑張つてきた16年間、きっと神が私の努力を認めてくださつたのね！ありがとう、始祖ブルミル！ありがとう、あの2人の気まぐれ！ありがとう、あの球に触れないでくれていたシンジ！」

ルイズはそういうと、始祖やあの三人組に感謝をした。しばらく祈りのポーズのルイズだつたが、飽きたのか、また自分の足元に影のよつなるものを広げ学院に帰つていった。

自分の部屋に戻つたルイズは、すぐにベットに飛び込んだ。どうやらずいぶんと疲れていたようだ。

ルイズはうとうとしながら思つた。自分には昨日までは何もなかつた。あつたのは自分の、「ゼロ」という不愉快きわまりないあだ名だけであつた。

だが今日、それは覆された。自分はアダムやリリス、他の使徒達の能力が手に入った。実現出来るかどうかはわからないが、科学という魔法とは異なった知識も持っている。

だが、その力に溺れるようなことはしないと誓う。現に、あの記憶の中に出でたネルフという組織はあまりに大きすぎる知識を持ついたため、最後には滅んでしまった。

自分は貴族らしく、華麗に生きるのだーそうルイズは心の中で誓い、眠り始めた。

彼女の寝顔は今までの人生で、最高に幸せそつだった。

第2話

翌日の朝、ルイズはいつもよりも早く目が覚めた。窓の外はまだ薄暗く、後1、2時間はしないと太陽は昇らないだろう。

「ふあ～あ、よく寝たわ。でも、ちょっと早く起きすぎたわね。暇だわ。」

ルイズは、洗顔をすませ服を着替えると、ベッドに腰をかけそう言った。

「またデイラックの海の実験でもしていようかしら。今度はどこに行こう？・・・あっ、あの3人がいた世界に行くことは可能なのかしら？」

ふと、そんな考えが浮かんだのでルイズは考えてみた。

（そもそも、時間を移動することは流石に無理と思つのよね・・・。でも、現にある3人はあの場から消えた。ひょっとすると、あの3人が行った先は過去では無く、まだサードインパクトが起こる前の同じようで異なる世界へと行ってしまった、そう考えられないかしら？）

あの知識の中にこんな考えをする学者達がいた。

例えばじょんけんをしているAとBがいたとしよう。じょんけんをするまでは同じ世界で、Aがグーカチヨキカパーを出す可能性があるよつこそれぞれの手を出す歴史を持った世界が3つ出来る。よつて世界はあるで、分かれしていく木の枝のように沢山の世界が出

来る

この説が正しければ、あの3人はその沢山の世界の内の一つに行つたということになる。

（あの3人はただ世界を移動したとすれば、私も異世界であるハルケギニアからあの赤い世界にいけるかもしれないわね・・・よし！いつちょやつてみましよう！）

そうしてルイズはあの赤い世界のことを脳裏に思い描きながら、影のようなものを足元に広げ、潜つていった・・・

今は全生命が滅んでしまった地球、あいかわらず赤い波が海岸に押し寄せる以外は特に変化は無いのだが、少女が消えてしまった場所にルイズは姿を現した。

「着いた、ということはやっぱり異世界の移動なら可能なのかしら？だつたらもし召還したのがあの球じやなく、あの3人組だつたら逃げられてたかもしれないわね・・・ルーンも強制的に解除されてたかも・・・」

あーこわいこわい、トルイズは呟くトルイズは記念に持つて帰るものを探し始めた。

「やつぱり、電化製品はもつて帰りたいわね・・・、病院とかの施設に行けば発電機ぐらいはあるかしら？」

そして行動し始めたトルイズだった。

約1時間後、ルイズは様々な物をティラックの海に入っていた。まるで猫型ロボットのポケットみたいな使い方である。

「家電製品の他に侵攻してきていた戦自の装備品も沢山手に入ったわね・・・ついでにアダムの力を使えばロンギヌスの槍も回収できるのかも・・・」

そういうとルイズは強く念じ始めた。

(ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！ロンギヌス来い！)

すると案の定、空の彼方から赤い槍が急接近してきた。やがてそれはルイズの側に来ると、ルイズが持てる大きさになってしまった。

「・・・・これは、流石に、反則よね・・・いやという時だけに使うとしてその時意外はずつとティラックの海の中に放り込んでおきましょう・・・」

そう決めるルイズはまた学院の自室に戻つていった・・・。後に残されたのは赤い、ルイズの便利な道具管理庫となつたのにも等しい世界だけであった・・・。

自室に戻り、部屋を出たルイズは同級生であるキュルケに声をかけられた。

「おはようルイズ。あれ？貴女つて進級出来たの？なら使い魔は何処？」

「おはようキュルケ。使い魔はね・・・何故か知らないけど、私自身にローンが刻まれちゃったのよ。ほう。」

若干言いにくそうにライズはそう言つと額のローンを見せた。

「アハハハハハ、な、なによそれ、貴女つて体を張ったギャグでもしたかったわけ？！流石ライズね！私には出来ないことを平然とやつてのけたわ！でもそこに痺れもしないし憧れようとも思わないけどね！」

「黙りなさいッ！そういう貴女こそ一体何を召還したのよ。貴女つて火の系統だからチャツカマンでも出てきたの？」

「ちやつかまん？何それ。まあいいわ。これが私の使い魔、サラマンダーもフレイムよ。フレイム！」こっちにいらっしゃ～い。

その呼びかけに応じるようにしてキュルケの部屋から出てきたのは平均サイズよりも大きいサラマンダーだった。

しかし、ライズを見た途端にキュルケの背後に怯えるようにして隠れてしまつた。ひょっとすると、野生の勘でライズが自分とは天と地程の差があることを感じ取つたのかも知れない。

「ブツ、貴女のサラマンダーって見た感じは大きいけど、性格は随分とちつちやいようね。何だつてゼロである私を見て怯えるんだから。あ～おかしい。」

「ち、ちょっと？一ビービーしかったのよフレイム？！まさか貴方つて本当に気が小さいの？・・・はあ～。何だか朝っぱらから疲れちゃつたわ。また後でね・・・ライズ。」

そう言い残しキュルケは去つていった。そんな彼女とは対照的にルイズはウキウキしながら食堂へと向かつていった。

アルヴィーズの食堂。ここではいつものように食べる前に始祖への祈りを捧げていた。ルイズも祈りを捧げながら

(うわー、これってどう見ても食べすぎよね・・・。全然さやかじゃないし・・・。)

異世界の様子を知つたことで、自分達がどれ程恵まれているのか実感したのである。何だかルイズは食べられる自信が無くなつて来たので、あまたの分はこつそりとティラックの海に入れておいた。本当に便利な能力である。

授業を行う教室に移動し、しばらくすると、シュルブルーズという土系統のメイジの教師がやって来て、生徒達に魔法の基礎をおさらいさせ始めた。

その間にルイズは他の生徒から使い魔のことだからかわれたが、精神的に成長したルイズは適当に受け流しておいた。

「そろそろ静かにしなさい。じほん、え～皆さんは魔法の四系統はご存知ですね？魔法の四系統とは火、水・・・」

シュルブルーズが基本的なおさらいをしている間、ルイズは暇だった。それらは自分が既に知っているものばかりだったからだ。なのでルイズは少しだけうとうとしてしまつっていた。

「・・・ス・・・ス・・・ス・ヴァリエールー聞いているのですか？」

「あ、ハ、ハイ。ミス・シュルヴルーズ、すみません、聞いていませんでした。」

「なら罰として貴女には前で実際に、連金をしてもらいましょう。」

当てられてしまつた。

周りの生徒達もルイズ本人も必死に危険性を訴えた。無駄だつた。だからルイズには被害が出来るだけ少なくなるよう祈りながら杖を振つた。

授業が終了し、ルイズは廃墟の片付けをしていた。そう実はこの廃墟、先程までは授業をしていた教室だったのである。すごいぞ！すごすぎるぞ、リフォームの匠、ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール！ルイズは前向きに考え方としてそう考えてみたが、逆にむなしくなってしまった。

しばらく一人で片付けていると、通りすがりらしき一人のメイドが話しかけてきた。

「あの、ミス・ヴァリエール？大変なようですのでお手伝いいたしましようか？」

「あ、ならお願ひするわ。貴女、名前は？」

「シエスタと申します。」

「やつ、シエスタっていうのね。ありがとうございます。」

その後片付けを再開したが、やっぱり人手が増えた分、楽になつた
ようでやがて片付けは終わつた。

「ふー。終わりましたね、ミス・ヴァリエール。」

「貴女が手伝つてくれたおかげで早く終わつたわ。感謝するわよ。」

「いえ、当然のことをしたまでですよ。私のようなメイドなんかに
感謝なさらないで下さい。」

「私としては貴族は平民に感謝するべきだと思つていいのよ。貴女
達のおかげで私たちは暮らしていけるんですもの。後、私のことは
ルイズでいいわよ。」

「・・・ルイズ様、貴女なら将来、立派な貴族様になれますよ！応
援しています！それでは私はこれで。」

そう言ひシエスタはペコリ、と頭を下げると教室を出て行つた。

「・・・人に感謝されるつていいわね。」

ルイズもしばらくしてから食堂へと向かつた。

その後ルイズはヴェストリの広場にいた。そこで、ルイズは何故自分
分がこんなことになつているのか考えてみた。

きっかけは些細なものだつた。ギーシュの落とした香水の瓶をシ
エスタが拾つたのがきっかけだつた。その場を何とかをごまかそう
とギーシュがシエスタに責任を押し付けようとしたのだ。

そこにやつべきシエスタに手伝ってもらったこともあって、ルイズは彼女を援護するようなことを言ったのだった。その後ルイズはシエスタの変わりに決闘を申し込まれ、今に至ったのであった。

(ああ、めんべくかいわね。)

ルイズは周りが騒ぎ立てる中、そう思った。

第2話（後書き）

どんどんルイーズが最強になってしまつ・・・

第3話

「よく逃げずに来たね、ヴァリエール！」

「何で貴方『』ときには逃げないといけないの？何なの？バカなの？」

「フツ、やう言つていられるのも今だけだよ、ミス・ヴァリエール！君とは僕のワルキューが戦つよ。」

杖が振るわれ 一体の青銅製の「ゴーレム」が鍊金される。

ルイズは「」でちよつと懸をしてみよつと懸つた。

「ギーシュ・・・貴方のワルキューって素晴らしいわね！」

「ははは、本当にことを言ひのまよしてくれよ。照れるじやないか。」

「

「でも・・・・貴方のそのワルキューはそのままじや名前負けしちやうわよ。貴方の青銅のゴーレムはもつと相応しこ名前があるわー。」

「な、なんだつて！？これでも一生懸命考えたのだが・・・・一体どんな名前が相応しいんだ？！教えてくれミス・ヴァリエール！」

「じゃあ教えるわよ、それはね・・・・」

「ぐく、誰かが息を呑む音が広場に響いた気がした。

「4千年の歴史を持つ国で作成されたと言われる、高度の技術を搭載した全自动人形。時代を先駆ける者という意味を持つその名前は・・ズバリ！先行者よ！――！」

先行者。その名前を聞いた瞬間、ギーシュの体を衝撃が走った。

「先行者・・・！なんて素晴らしい历史を感じさせるその名、そして時代を先駆ける者という意味を持つ所！まさに僕のワルキューにぴったりだ。いや、これからはこのゴーレムは先行者と名付けようじゃないか！」

「そうでしょう！素晴らしい名前よねー！」

絶対騙されてる！絶対騙されてるよ、ギーシュ！心なしか前よりも弱くなっちゃったよ、それ！

何故かその場にいた人間は全員そう思った。しかし、ギーシュは本当にそう改名してしまった。

「そう！僕と先行者の歴史は君を倒す所から始まつていくのを…まあ、いざ勝負！」

「ねえ、ちょっと待つてよギーシュ。私は魔法が使えないから銃を使つてもいいかしら？」

「ふつ、君は平民なんかの道具に頼るのかい？まあいいだろう。使うが良いぞ！」

ルイズは流石にディラックの海を公の場にさらすつもりはなかったので、自分の部屋に戻ったように見せかけ、適当に引き当てた三脚

がついているマシンガンを引っ張つてまた広場に戻ってきた。

「待たせたわねギーシュ。後、死にたくなかつたらフライで空中から指揮をとつた方が良いわよ。」

「ん？ ずいぶん変わつた銃だね。先行者といつ名前をくれた君がそう言つのならそうしよう。さあ、いけ！ 先行者！」

ギーシュがそう声を張り上げると同時に、先行者がルイズに襲い掛かってきた！

ズガガガガガガガガ、ズガガガガガガガ。

ルイズにたどり着く前に先行者はたつたの5秒ほどで体の軽量化に成功していた。穴が沢山出来て風通しも良くなつたようだ。まあ、肝心の攻撃は失敗してしまつていたが。

沈黙が広場を支配した。ハツと我に返つたギーシュが恐る恐るルイズに尋ねた。

「あ、あの～、ミス・ヴァリエールさん？ 貴女が使つている物は一体何なのでしょうか？」

「見て分からぬの？ 銃よ。」

「嘘をつくな！ 銃は連射出来ないだろ？ が！ たつた5秒ほどで死なになるなんて、君は何発撃つたんだ？！」

ルイズは銃の性能を思い出しながら言った。

「え～と？ 120発ぐら～い？」「めんなさい。他の物ど～いぢやないつてるかもしれないわ。」

120発！？その場にいた誰もが啞然とした。科学技術が遅れてい
るハルケギニアの銃は先端から銃弾タイプなので1発しか撃てない
からだつた。

「いやいやいや、そんな銃だと知つていたら許可は出さなかつたよ
！」

「男に一言は無いつて前、貴方が言つていたじゃないの。矛盾して
ない？」

「うっ・・・なら、行け！先行者達！」

慌ててギーシュは杖を振るい、それにあわせて出現する六体の先行
者達。

そして約1分後・・・

案の定、先行者達はただの青銅の破片と化してしまつていた。

「まだ続ける気はあるの？ギーシュ。」

「もう見て分かるだろ・・・降参だよ・・・。」

その後はルイズがギーシュにモンモランシーやケティ、シェスタなどに謝罪をさせ、決闘は終了した。食べ損なつた昼食をとる為に食堂へ戻つたルイズが、シェスタから詳細を聞かされ感動したマルト
ーに

「お前さんこそ本当の貴族だ！！」

と抱きつかれ、ちょっとした騒動があったのは完全に余談であった。

一方、オスマン達は・・・

「間違いありません！あの額のスケッチのローンは間違いなくヨコズニトールンのローンです！」

今日は珍しくミス・ロングビルが熱を出して休んでおり、決闘のことを報告しようとする教師達もいなかつた為に広場の決闘に気付くことはなかつたのであつた。

第3話（後書き）

今回はいつもよりも短くなつてしましました。次回は今回以上に頑張りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2647f/>

スーパーシンジならぬスープールイズ

2010年10月14日15時39分発行